

聖書:使徒の働き14章1~18節

説教:自分の足で、まっすぐに立ちなさい

はじめに

聖霊によって教会から送り出されたパウロとバルナバが、地中海沿岸にある町を訪ねながら福音を語ると、多くの人たちが救われるいっぽうで、今日の箇所にもあるとおり、迫害が起きます。そこで困ったのは、救われてクリスチャンになった人たちです。信じたことによって町の人たちから嫌がらせを受けて、それを我慢するしかありません。伝道の働きが聖霊の業であるなら、聖霊は信じる人々も守ってくれるのではないかと期待しますが、そう簡単な話ではなさそうです。

これは他人事ではなくてみなさんも経験がおありでしょう。神を信じた最初の頃は、「私の悩みはなくなってこれで幸せになれる」と思っていたけれど、そのうちクリスチャンになる前よりももっと大変な問題にぶつかって苦しむことになり、冗談半分に「信じない方がまだ良かった」と嘆くこともある。神を信じているのに、なぜ信仰者は苦しみあわなければならないのか。つきつめれば、そんな疑問に行き着きます。神はどこにおられるのか。今日の箇所からともに考えてまいります。

1 信仰と迫害

1) 信じる人たちと信じようとしなない人たち

1, 2節を読みます。「イコニオンでも、同じことが起こった。二人がユダヤ人の会堂に入って話をすると、ユダヤ人もギリシア人も大勢の人々が信じた。ところが、信じようとしなないユダヤ人たちは、異邦人たちを扇動して、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。」

1節に「同じこと」とあるのは、前回のアンティオキアの町で起きたことと同じことが、イコニオンでも起きたということです。その「同じこと」の内容ですが、二つあります。一つ目、それはよいニュース。パウロがユダヤ人会堂に入って旧約聖書を聞きここにイエス・キリストが記されていること、エルサレムの指導者たちはこのイエスを救い主として認めないで十字架で殺したこと、しかし主は三日目に死からよみがえられて信じる者を罪から救ってくださること。この福音はユダヤ人だけでなく異邦人にも等しく語られていること。それらを語ったらユダヤ人も異邦人も大勢信じた。これが一つ目。

「同じこと」の二つ目、これは悪いニュース。大勢の人たちが信じたいいっぽうで、信じようとしなない人たちが異邦人にデマや嘘偽りの情報を流して、クリスチャンとなった人たちを憎むようにさせたというのです。なぜそんなことをするのか。ねたみとお金の損得が関わっていると前回言いました。それからもう一つ付け加えることができる。

明治の時代、日本にハリストス正教を伝えたニコライという人がいます。彼があるとき岩手に行き、日本人宣教師たちから聞いた話が彼の日記に記されています。信仰者となったある女性が、以前から患っていた婦人病による出血で亡くなった。それを聞いた村の人たちは、人の生き血を飲むために耶蘇たちが釘を刺して殺したのだとうわさしたというのです。新しい宗教に触れたとき、気味悪さを感じたのでしょうか。ひどい話ですが、パウロの時もおそらくこれに似たようなことがあった。それでもパウロとバルナバは大胆に福音を語り続けました。

2) 難を避けて

こうして救われる人たちが多くなるにつれ、それに比例するように問題も深刻になっていきます。

4, 5節。「すると、町の人々は二派に分かれ、一方はユダヤ人の側に、もう一方は使徒たちの側についた。異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒にになり、二人を辱めて石打ちにしようとしてた。」

迫害が起きたと聞くと悲しくなりますが、別の見方をするなら福音が急速に拡大していったため、このような争いに発展したということも言えるでしょう。前回も言いましたが、この伝道旅行は聖霊の働きによるものです。聖霊の働きによって信じる人たちが起こされると同時に、人の目には問題と思われるようなことも起きていく。しかしそこにも聖霊が働いておられる。問題にしか見えないことのなかに実は深い神のご計画が隠れている。ここでもそうです。迫害が激しくなったんでパウロとバルナバは、リステラという町に逃れなければならなくなる。「難を逃れる」とあるので、なにか戦いに負けたとか戦いから後ろに退く、逃げていくという印象があります。

2 しるしと不思議によって

1) ふさわしい信仰

でも決して後ろ向きの話ではありません。難を逃れてリステラに行ってみると、生まれつき足が動かない身体障がい者がじっとパウロの話聞いています。パウロの周りには大勢の人たちがいたはずなのに、パウロはこの足の不自由な人に目を留めます。からだの不自由だから「かわいそうだ」とか、「なにかしてあげよう」というような「上から目線」の、迷惑な親切心とはちがいます。

9節。「彼はパウロの話することに耳を傾けていた。パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見た。」

パウロは人々に語りながら、この人に「信仰があるかどうか」を見きわめようとします。パウロのことばを一言も漏らすまいと真剣に聞きました。ただイエスを救い主として信じるならば、あなたは罪赦されて義とされるのだと聞いて、涙を流していたのかもしれない。いずれにしても、あえてことばで信仰を確認するまでもなく、この人は心の底から救いを求めていることが伝わってきた。そこで10節。「大声で『自分の足で、まっすぐに立ちなさい』と言った。すると彼は飛び上がり、歩き出した。」

2) 自分の足で

パウロの言葉に目を留めます。どうしてパウロはただひとつ「立ちなさい」と言わなかったのか。考えてみると実に不思議です。そんなことにこだわるのかとあきれられるかもしれませんが、一人の人を救うためにパウロは必要なことをすべて無駄なく語ったはずです。すべてに意味がある。

まず一つ目、「自分の足で」ということば。立つためには自分の足を使うのは当たり前ですから、言わなくてもよいはず。それなのにわざわざ「自分の足で」と言うのです。そこで考えたい。この人は、これまでどのようにして生きてきたかです。今とは違って、障がい者を支える法律や制度があるわけではない。小さな時から人々の施しで命をつないできたはずです。

インドにはカースト制度があるのを聞いたことがあると思います。一番下のカーストの人は強い差別を受けるので、施しで生きていくしかない。それで親は子どもをどのように育てるか。私は聞いて驚いた。親は、わざと子どものからだを傷つけて障がい者にしてしまうというのです。そのせいなのか、インドに行くとありとあらゆる障がい者がいました。

足の不自由な人は、からだの障がいを人に見せて生きてきた。言ってみればほかの人の足にもたれかかっていたようなものです。けれども、これからは自分の足で立って、自分で生きていく。これが「自分の足で」という意味です。

3) まっすぐに

二つ目は「まっすぐに」ということば。姿勢としてまっすぐに立つ。もしそれだけならわざわざ言う必要はありません。ここは、姿勢のことではなく、まっすぐな道を歩んでいく。そういう意味ととらえたほうがよい。あなたは罪が赦されて義とされたのです。これまでは泥んこで曲がりくねったような大変な道だったかもしれない。でもこれからは、神が備えられた道を真っ直ぐに歩む。そういう生き方に変えられるのです。

足の不自由な人はなぜ変えられたのか、その理由は何か。9節後半。「癒やされるにふさわしい信仰が」あったから。施しで生きてきた人ですから、差し出すものは何もない。ただ救われたいという願いを差し出したとき、この人は救われました。

3 神が備えられた道を歩む

1) 空しいことから離れて、生ける神に立ち返る

その結果、この人は飛び上がって歩き出します。パウロが霊能力を持っていたのではありません。3節後半にあるとおりです。「主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。」人々が主を信じる事ができるようにと神がこのような不思議を与えられた。

ところが、ここで一騒動が持ち上がる。バルナバをギリシャ神話の最高の神であるゼウスと呼び、パウロを同じくゼウスの子であるヘルメスと呼び、雄牛まで連れて来た。今の若い人たちは、何かすごいことを見たり聞いたりすると「神だ」と言うそうです。だいたいレベルは違いますが、これに似ています。さすがにパウロはこれを見て黙っているわけにはいかない。衣を裂いてこう叫ぶ。15節。「皆さん、どうしてこんなことをするのですか。私たちもあなたがたと同じ人間です。そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。」

野心がある人なら、この機に乗じて新興宗教の教祖になってしまうでしょう。もちろんパウロにはそんなことはしない。これを福音を語るよい機

会と見て取って、ゼウスやヘルメスなどと言って空しい神々を拜むのではなく、この世界を造られた神に立ち返るようにと語り続けます。

2) 自分の足で、まっすぐに

パウロが、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい。」と叫んだらそのとおりになったのですから人々が驚くのは無理ありません。しかし私たちは目に見えるものではなく、見えないところに目を留めます。自分は自分の足で真っ直ぐに立っているのか、そんな問いかけがされているのではないのか。自分の足で立つということは、自分であらゆることを決められる一方、どんな困難があっても自分で引き受けなければならないという意味でもある。たとえ自分に責任がなくても、災難のようなことさえも逃げないで引き受けることを意味します。でもなかなか難しい。抜け道や楽な道を探したくなる。でも主はどのような道を歩まれたのか。十字架に到る真っ直ぐな道でした。苦しみが待っていることを知っていても、わきは絶対にそれません。主が私たちの罪を背負われ、身代わりとなってくださり、それによって私たちが義とされたのであるなら、私たちも主の足跡をたどって歩んでいきます。これこそ永遠のいのちに至る道であるならば、私たちは忍耐しながらまたともに手を携えながら歩んでまいります。